

農業の楽しさをもつと語りあおう！

札幌大学

教授 岩崎 徹

業（ナリワイ）としての農業、

「こんな楽しいものはない！」

夏休みに学生達と釧路支庁浜中町へ調査に行った。浜中町では四〜五年前から離農跡地に新規参入者が、いわゆるリース牧場を営んでいる。リース牧場はもう七軒にもなる。リース農場の人たちは皆情熱的で発想が斬新なので、地域社会に大きな刺激を与えている。農協では新規就農予定者のために技術や経営のノウハウを教えるための施設、新規就農者研修牧場をつくりこの制度を拡充しようとしている。私は以前にも浜中町を訪れリース牧場の何軒かを訪ねたが、家族の人たちの目は輝いていて、

将来の夢を熱く語りつづけた。

今回は、浜中町厚陽の服部宗一さん宅にお邪魔した。服部さんは四十六歳、奥さんの紀世子さんと長女の菜々子さんの三人が働いている。ほかに家族は高校生の次女実々子さんがいる。服部さんの経営は経産牛三十五頭、育成牛三十一頭の計六十六頭、牧草地三十六ヘクタールだが、浜中町の中ではむしろ小さな経営といえる。

服部さん夫妻は「儲ける農業は無理。でも業（ナリワイ）としての農業はこんな楽しいものはない」という。服部さんが北海道に来る

前は埼玉県にあるホンダの子会社で働いていた。七年前、隣の厚岸町に転勤になった。憧れの北海道への転勤であった。北海道では自然に親しみ、自給農業をしようと考え実践した。厚岸時代に浜中町農協組合長・石橋栄紀氏と出会い浜中町に入植しないかと勧められた。職業としての農業には不安もあつたが職場を辞め、昭和六十三年十一月現在の所に入植した。最初の二年間はともかく必死に働いた。合理的経営、近代的酪農を目指し、少しでも乳量を増大させ、経営の採算を合わせることはかり考えていた。飼料の配合を工夫し、乳量を増大させるため年間舎飼にした。けれど「何かおかしい、自然でない」と感じていた。

そんな折、ひとに誘われて「自然の酪農をする」研究会に参加した。そんなきっかけもあり、今年から経営理念を変えた。既存の施設、土地、労働力に合わせた経営、牛の生理に合わせた技術。堆肥も過剰に散布すると河に流れ環境を破壊するので、自分の草地に必要な分だけをつくる。いわば「人と地球にやさしい酪農経営」を目指したいと思うようになった。服部さんは「農業の将来は悲観していない。儲ける農業は無理だが、本当の農業をした人は増えるだろう。業（ナリワイ）としての農業はこんな楽しいものはない」。手作りの楽しさ、収穫の喜び。すぐ近くで山菜、山葡萄、グミ、苺、苺がとれる。飼っている羊でセーター

や手袋を編む。絵を描き、自然を謳う。天気がよければ湿原や海に行き、山菜や苺や山葡萄を採る。

酪農は休日がないというが、時は自由になれるし、こんな楽しいことはないという。

農業はやり甲斐のある

楽しい仕事と胸を張って！

北海道農業を取り巻く状況の厳しさはいうまでもない。しかしながら、枕言葉のように「厳しい、

で気になることがある。「娘は農家に嫁がせたくないが、息子の嫁

を」の矛盾はいつも指摘されるが、花嫁問題を解決すべき関係者も、実は同じことをしているのである。つまり、一方ではとかく悲壮な顔をして農業の厳しさを語り、他方で花嫁探しを躍起になっただのである。夢やロマンを語らないで、悲壮な顔をした農業青年や関係者に会って、農家に来ようと思ふ女性はいまい。

農業の「暗さ」だけを伝えては

こなかかったかー私の反省ー

今年ゼミのテキストで、大内力著『農業の基本的価値』(家の光協会)を使った。読了後の総括討論で、ある学生が「農業の基本的価値は分かった。ではこの中で農業経営をしてみたい人はいるか」との質問をした。そこにいた二十余人の学生のなかで「チャンスがあればやりたい」と言ったのは一人。あとは「やりたくない」、しかもほとんどが「絶対やりたくない」と答えたのである。理由は「見通しが無い」、「儲からない」、「都会

の方が刺激的」、「3Kだから」である。ゼミ生の中には出身が農家や農業団体というのが少なからずいる。また、ゼミ生は「農民の味方」の方が圧倒的に多い。にもかかわらずである。私は学生の「偏見」を感じ、少々焦りながら農業の営みの大切さを説き、農村こそ本当の生活ができた本来の文化が育てられる、と説いた。だが学生はなんとなくシラケていた。

考えてみれば私は授業中、農業の環境が厳しいこと、割のあわな

いことを強調しすぎて来たようだ。授業では北海道農業に関するビデオをよく使うが、農地の価格の下落、土地改良問題、自由化による経営の悪化等々、農業の「暗い」面ばかりを取り上げてきたようである。それはマスコミの流す「農民は甘えている」、「自由化は歴史の流れ」、式の農業過保護論を批判したかったがためである。もちろん農民のたくましさも伝えつつもりなのだが、学生にしてみれば農業の「暗さ」ばかりが印象に残ってしまったようである。

先に紹介したリース牧場の例は特別と言われるかもしれない。「自然の美しさや夢だけではメシは食えない」という反論が返ってこよう。しかも今ほど農業経営のセンスが問われる時代はないのである。けれどこんな時代だからこそ「企業としての農業経営も大事にしながら、ソロバンではいけない農業の良さ」(有村利宣『どうするこれからの北海道農業』)北海道農業構造研究会編』を、もっともっと語り合う必要があるのではないかとと思う。

この点で、例えば花嫁問題など